



切り絵 比企善彦作

うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所
茨木市元町4-3

072 (622) 2346

http://www.
ibarakijinja.or.jp/

「古事記」撰上千三百年

平成二十四年は「古事記」が撰上されて千三百年目の年になります。我が国初の歴史書であり正史である「日本書紀」が編纂される僅か八年前に出来たのですがその理由が「古事記」の「序文」に撰者太安万侶公によって記されています。

そこには、「上古の時は、言意朴にして、…字に於いては既に難し。…詞心に及ばず。全く音を以て連ねたるは、事の趣さらに長し。」と記されています。当時は漢字が伝えられて久しく、役人等は自由に漢字を使いこなしていました。漢字(漢文)で書かれたものは書かれるごとに「古言(本来のやまとことば)」から離れ、違つてゆく。今ならまだ、「古言」は失われていない、まだ間に合うので古言にかえそうと天武天皇がお考えになられたのです。

「古事記」の編纂は、元明天皇が太安万侶公に詔して和銅五年(七二二年)に完成・撰上されましたが天武天皇のお考え・お気持ちに負うことにつきます。数多い天武天皇の事績の中に伊勢の神宮二十年に一度社殿を建て替える「式年遷宮」の制や日本初で独自とも言われる都「藤原京」造営があります。その実施や完成は、次の持統天皇の時代ではありますが天武天皇の発意によるものです。天武天皇は、日本の太古からの精神文化を守り受け伝えるため、その継承に心を砕かれました。天皇の御心は、序文中の「稽古照今(いにしへを鑑みて今を照らす)」の言葉にもよく表されています。

いよいよ翌年、平成二十五年には第六十二回神宮式年遷宮が斎行されます。その前年にあたる今年「古事記」撰上千三百年にあたり今一度、祖先・先人たちから受け継いだ文化・伝統を見つめたいと思います。

シリーズ神道 ③④

三種の神器

『天叢雲劍』

『八咫鏡』 『八尺瓊勾玉』 と同じ三種の神器のひとつ 『天叢雲劍』 は、別名 『草薙劍』 とも称します。

『古事記』 『日本書紀』 の『八岐大蛇退治』 の段、須佐之男命が高天原においての行いにより天照大御神のお怒りに触れ、高天原を追放されて出雲の肥の河の鳥髪という所にお降りなされました。



熱田神宮

その際に国津神の大山津見神の子の足名稚と妻の手名稚から苦難の事情をお聞きになり、娘の櫛名田比売を嫁に貰い受けることを条件に八岐大蛇を退治する事をお引き受けになり、須佐之男命のお働きにより見事に八岐大蛇を退治されました。その時大蛇の尾の中より取り出された一振りの太刀が『天叢雲劍』です。

須佐之男命は、非常に神々しい神秘的な太刀とお思いになられ天上の天照大御神にご献上されました。

その後、『天叢雲劍』は天孫降臨の折りに『八咫鏡』と『八尺瓊勾玉』と共に天照大御神より瓊瓊杵尊に手渡され神々ともに高千穂の峯にお降りになりました。

瓊瓊杵尊がお持ちになられて以降、皇居内にて『八咫鏡』・『八尺瓊勾玉』とともにお祀りされておりましたが、ご神威を恐れ畏んで第十代崇神天皇の御代に皇女豊御入姫命により『八咫鏡』とともに皇居の外でお祀りする様になりました。後に垂仁天皇の皇女倭姫命に引き継がれ、併せて現在の伊勢神宮内宮

にお祀りされました。

第十二代景行天皇の皇子・日本武尊が東国の征圧に向かわれる折、伊勢神宮にて倭姫命より『天叢雲劍』を賜り東国へ向かわれました。相模国で周囲の草木に『火』を付けられた野火の難に遭われた際に、この神劍によつてこの難を払い退けました。

献詠 火串会

参集殿紅白千両耀へる

倉垣刀美子

冠雪の裾野巡りて神南備へ

岡田 晴江

仕来りは除除にはいきて老の春

小野 晶子

氏子等の仕事始や槌の音

河辺さち子

懇ろに庭の手入れや年迎、ふ

北川 一志

天地人輝き充てる初日の出

倉垣 政一

茨木社幾年詣で今日の春

田中美佐子

千支重ね初卯詣のめでたさよ

谷本 房子

これにより「草を薙いだ劍」即ち『草薙劍』とも呼ばれることになりました。

日本武尊は、東夷平定の帰路、病に罹りお亡くなりになられます。尊の妃・美夜受比売が尾張国に『天叢雲劍』を奉安して社を建てられます。今日の熱田神宮です。

朱の燈籠たどりし奥の淑気かな

長谷川ゆたか

帰りませう

雪のふるさと遠くとも

林 曜子

初詣神楽の笛の透き通り

武藤千代子

臘梅の一朵に日蔭日向かな

森脇甲子朗

売初や派手に並びし福袋

八木 徹

書初や堅き穂先をまつ解し

山田 国夫



日本の偉人

二宮 尊徳

二宮金次郎(尊徳の本名)といえ、かつてはすべての小学校に勤勉の大切さを教えるため薪を背負いながら本を読んでいる像がありました。

金次郎は天明七年(一七八七)、小田原藩相模国栢山村(神奈川県小田原市)の比較的裕福な農家に生まれました。五歳の時、村を流れる酒匂川が氾濫し、田地田畑を全部流してしまします。「栢山の善人」と呼ばれる程村人たちに尊敬されていた父の利右衛門は、元々弱い体を押し率先して土手の普請に出ましたが、それが元で病に伏せてしまい、金治郎十四歳の時に他界します。母よしと第二人での生活は厳しく、毎朝山に薪取りに向かい、城下町でお金に換える生活をしします。その往復六里(二十四km)を学問を好んだ亡き父を偲び、自分も立派な農民になりたい思いで読書しながら歩きまわした。無理がたたった母も金次郎十六歳の時に亡くなり、兄弟は別々の親族に預けられ離ればなれに

暮らさなければならなくなります。二宮家は次第に貧しくなっています。

金次郎は、父の影響もあり幼い頃から勉強好きでした。六、七歳から読書を始め「仮名頭」「実語教」というような、当時なら誰もが読むものをまず学び、十二、三歳の頃には「大学」や「論語」を読むようになり、知性と品格を身につけていきます。

十三歳の時、金次郎は子守として働きに出ます。御礼に二百文のお金をもらおうと、そのお金で稲売りにから売れ残りの松の苗を二百本買い、松の木は堤を丈夫にするというので、酒匂川の堤防に植えまします。金次郎は、子供の頃からいかに村を洪水から守るか考え、暇があれば堤防を見回り、松が無事に育っているかを見て歩きました。貧しい中でも自分のことを考えるのではなく、世のためになることにも目を向けるという、「推譲(世のため)に尽くすこと」の精神が早くも見られます。

金次郎は昔のような二宮家にしたいと思ひ昼夜をいとわず働き、一日の仕事を終えると夜遅くまで本を読み学びました。ついに金次郎二十四歳の時、一町四反あまりの田畑を持つことができ再興を果たします。

その後、小田原藩家老の服部家に雇われることとなります。服部家の子どもたちの教育係をよく務め、服部家の経済の立て直しにも力を注ぎました。贅沢を謹み、毎日の節約を強く勧めこれが「積小為大(小を積んで大と為す)」の教えのもとになりました。服部家の財政を立て直したことが、藩主の大久保忠貞公の耳にも入ります。そして、当時財政も人心も荒れ果てていた下野(栃木県)の桜町の立て直しを命じられます。金次郎



尊徳の肖像 (昭和21年発行1円札)

は、十年で桜町の復興を約束し見事復興を果たします。

「下野に聖人あり」との評判のもと、遠く谷田部藩(茨城県)、烏山藩(栃木県)、相馬藩(福島県)からも相談に来るようになり、全力で村や藩の立て直しに力を尽くされました。その数はおよそ六百村におよびました。

二宮尊徳は単なる勤勉の人ではなく、富と幸福につながる哲学をわかりやすく人々に伝えました。その教えは現在でも十分に通用するものがあります。

これからの主な神事

十二月三十一日 越年祭

一月一日 歳旦祭 午前十時

一月九日~十一日 十日戎祭

一月十五日 御火焚(とんど)・祈禱木奉焼祭

二月三日 節分祭・鎮魂星祭

二月十一日 紀元祭

二月十二日 初午祭

四月八日 人形奉焼祭

四月十八日

春祭(祈年祭)
奉賛会厄除安全祈願祭

遷宮だより

御正殿の建築が始まります

第六十二回神宮式年遷宮は、平成十七年五月二日に遷宮の御用材を切り出す安全を祈る山口祭に始まり、様々な祭典が斎行されてまいりました。平成十八年五月にはお木曳き行事が行われ当社の宮司を始め敬神婦人会・石門会他有志が参加ご奉仕いたしました。

平成二十年四月には一般では地鎮祭にあたる鎮地祭が斎行さ

れ、新御敷地（古殿地）が整地され、今年から本格的な新宮の御造営が始まります。

すでに美しく製材された柱と板が新しい宮地に運ばれ、正殿以下の建築が始まります。本年三月には立柱祭（殿の建築の初めに際し、御柱を立て奉るお祭）

・御形祭（正殿東西の妻の束柱にある装飾の一種で、それを穿つお祭）・上棟祭（正殿の棟木を上げのお祭）が斎行され、五月には檐付祭（新殿の御屋根の萱を葺初めるお祭）・七月には葺祭（新殿の御屋根の葺き納めのお祭で、葺覆などの金物を打ちます。）が斎行されます。

このように建方の節目節目で建物の守護神である屋船大神をお祭りし、作業を見守っていたべくようお願ひし建築がすすめられます。殿舎・御垣・鳥居などの新宮がすべてできあがると、翌二十五年秋にはいよいよ大神様を旧殿から神殿へお遷しする遷御が斎行されます。



前回、第61回 式年遷宮の立柱祭（左）と御形祭

黒井の

清水大茶会

去る十月十五日（土）・十六日（日）の両日、爽やかな秋空のもと茨木市観光協会主催の「黒井の清水大茶会」が開催されました。

この催しは当神社境内の西北端にある「黒井の清水」が豊臣秀吉公に気に入られ、茶席用にわざわざ大坂城まで運ばせたという「名水」として、古くより親しまれている清水であること



にちなんで、平成十二年より毎年の恒例行事として催されています。

当日、普段は参拝者の憩いの場として利用されている新設の待合所に赤い毛氈が敷設され、さながらコンサート会場のように、琴や雅楽の演奏も行われ大変好評でした。また、境内では野点の外、地域物産品の即売会や抽選会など様々なイベントも行われ、終日たくさんの人々が賑わい、二日間で二千三百人が訪れました。

（写真提供 茨木市観光協会）

